

近世：文芸史ゼミ（昭和三十二年日本文学
科ゼミナール紹介）

近藤，忠義

（出版者 / Publisher）

法政大学国文学会

（雑誌名 / Journal or Publication Title）

日本文学誌要

（巻 / Volume）

1

（開始ページ / Start Page）

64

（終了ページ / End Page）

64

（発行年 / Year）

1957-12-01

（URL）

<https://doi.org/10.15002/00018943>

なら、全員グループに参加してくれることを望んでいる。

文芸史ゼミ

近藤忠義教授

第一回研究作品は「さんせう太夫」（説経節）研究内容、①説経節とは何か。②作品の発生及び流行期の時代的背景。③感動の出所及び問題点の究明、その一助として異本と一部分比較。④作品形成期の社会機構とづし王の行動。その他。

第二回研究作品は「ゆりわか大じん」（説経節）研究内容、①作品のテーマ。②作品のテーマ把握上の問題点（イ）仏教教義の作品における具象化及びその意義、（ロ）別府兄弟の交心、（ハ）みどり丸の出現、（ニ）主人の為の自己犠牲、等をどう考えるか）③その他。

第三回研究作品は「うらみの介」（仮名草子）研究内容、①文学史上における作品の位置とその果たした役割、②恋愛と身分関係、③殉死、④作品の中の仏教、⑤作品と民衆の関係、等の問題。

西鶴置土産ゼミ

広末 保教授

各篇で問題とされた事を列記する。

卷一の一△大釜の抜き残し▽

○「世界の偽かたまつてひとつの美遊となれり」、序文のこの西鶴のことに就いて。このことばの内に西鶴は何如なるイデーを含ま

せているのか？

○構成の仕方に就いて。○主人公に対する西鶴の態度について（西鶴が自身でとりあげ追求していったものの解決の仕方と結びついてくる。）

卷一の二△四十九日の堪忍▽

○徳入を通して描きだされた廓の世界、この事の中に具現されている西鶴の方法について
○主人公が好色の道を断念することのリアリティの乏しさについて。

卷一の三△偽もいひすごして▽

○この作品で描きだされている前半の世界と後半の世界について。

○「人の果こそあさましきもなし」ということと「されども……ちよろまかすことなし」という事とが矛盾として把握することができずその結果としてフィクションを以て客観化されていのではないのか？

○「今橋の現銀という大臣」の話の設定について。

○「金太夫が文やら鬼の手形やら知らぬうら借や成るにと笑いぬ」誰が、どのような事について「笑いぬ」なのか？

卷二の一△あたご嵐の袖さむし▽

○零落した大尽に島原を通らせ、そこでおかみと女郎との会話との対決という設定の意図何如？

○「住める申斐なく思へど、其身になつて舌

もくい切りがたし」、——世はかるく暮して埒をあげぬ」（卷二）にあらわれた西鶴の話し法について。

卷二の二△人には捧ふりむし同前に思はれて▽

○主人公、利左衛門の意気地、内儀の心根について。この世界に対する西鶴の態度（このような世界をどの様に取扱っているか？）について。

この作品の内容と最後の数行の文章とのかかり合いに就いて。

近松ゼミ

広末 保教授

研究題目は近松世話浄瑠璃研究である。

研究作品は曾根崎心中、堀川波の鼓、心中重井筒、五十年忌歌念仏、心中双は水の朔日、今宮心中、冥土の飛脚（以上研究済み）鎗権三重帷子、山崎与次兵衛寿門松、博多小女郎浪枕、心中天網島、女殺油地獄、心中宵庚申である。

研究題目の主旨は近世悲劇の研究と云うこととで、近松の最初の世話浄瑠璃『曾根崎心中』から作品を分析してきたのである。だが、二年生が行っているゼミは本格的なゼミでなく、ゼミ形式を覚え、浄瑠璃の本質と作品分析の技術を修得することから始まり、現在でもこの状態から抜け切らないようである。